

アメリカとナチスドイツの癒着：明らかになっていく世界の深層構造

渡辺 久義

2017/05/10

終末（転換期）には一切の隠し事ができなくなる、と言った宗教指導者がいる。ということは、隠されていた世界の悪の深層構造が明らかになり、見えなかった恐ろしいものが見えてくるということである。恐怖と驚きで、見えてきたものに目をつぶっていたのでは（ピザゲイトがその例）、世界は変えられない。「**悪魔の最も精妙な策略は、自分が存在しないと思わせることだ**」という、この際びつたりの、フランスの詩人シャルル・ボードレールの言葉を、SOTN（State of the Nation）というサイトは引いている。この悪の根源を暴きえぐり出して、根絶しようという執念をもったこのサイトを、私はしばしば翻訳紹介している。

SOTN ではないが、Finian Cunningham の「ロシアに対する米英の決して終わらない戦争の深層歴史」という論文 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170507.pdf> は、ナチスドイツの犯罪に米英が協力していたことを明かす文書を、国連が、この 2 国のこれまでの長い反対にもかかわらず、ついに公開したことを知らせている。その不都合な事実はもちろんのこと、公開の事実そのものも、ほとんど報道されていないという。その公開には、終末の圧力が働いたものと思われる。しかし知っている人は知っていた。

連日、大量のユダヤ人たちが殺されていくのを、米英が知らなかったはずはなく、それを食い止めるための、インフラや鉄道への爆撃は十分に可能だったにもかかわらず、英米はそうしなかった。なぜなのか、彼はこう説明している――

西洋人の別人種に冷酷という要因のほかに、もう一つ、もっと悪辣な要因があった。すなわち、西側諸政府、あるいは少なくとも、その強力な一部は、**ナチスのソ連に対する戦争努力を、邪魔したくなかった**ということである。にもかかわらず、ソビエト連邦は、ナチスドイツを負かすための、西側の名目上の“同盟国”であった。この見方は、第 2 次大戦についての、公的に語られる西側の見方とは対照的な、根本的に異なった考え方があることを示唆する。

もう一つ、面白いことが言われている。F・ルーズベルトやチャーチルのような指導者は、

ドイツを負かすことに専念していたように見える。「にもかかわらず、彼らの個人的見解は、強力な西側の企業利益と、ナチスドイツの間の**組織的癒着**という背景に、馴染むものでなければならなかった。」これは、今で言えば、オバマもトランプも最高権力者である以上、何をやってよいが、**New World Order** という悪の「背景に馴染むものでなければならぬ」ということであろう。ケネディのように「隠れた悪を暴く」などと言い出せば殺される。

このナチスドイツとのアメリカの“組織的癒着”については、「ブッシュ家とナチスドイツとのつながり」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160309.pdf> を読んでもらえばわかるが、父子ブッシュのさらに上の祖父プレスコット・ブッシュについて、こんなふうに言われている――

ブッシュ一家が、募金による金をティッセン（ナチス戦争機械の中心となった鉄鋼王）に与え、1920年代にヒトラーが台頭するのを、援助させただけでも悪いことだが、戦時中に敵に援助と利便を与えたことは、反逆罪に当たる。ブッシュ銀行は、ティッセン一家を助けて、連合軍の兵士を殺したナチスの鉄鋼を作らせた。ナチスの戦争機械を財政援助することが、どんなに悪いといっても、ホロコーストを援助し扇動することは、もっと悪いことだった。…

ブッシュ以上の上層部にとって、敵も味方も、自国も他国も、犯罪意識もないということ、それでいて、それを悟らせないようにやっていく力量がなければ、アメリカでは指導者が勤まらないことが、ここからわかるであろう。これは単に、政治家が“私腹を肥やす”というものではないであろう。私腹も肥やすが、同時にそれは **NWO** の団結を固めるという、公に尽くすものでもあるだろう。（**NWO** という言葉を初めて議会で口にしたのは、父ブッシュだった。）これは“ピザゲイト”についても言える。ピザゲイトは最大級の犯罪だが、その凶悪犯罪によって、**NWO** に対する政治家同士の結束と忠誠を固めるからである。イルミナティ名家の12歳の少女 **Svali** が、バチカンの地下で生贄の儀式に出席させられ、**NWO** への忠誠を誓わせられるのも、意味的には同じである。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160122.pdf>

もう一つ、カニンガムの引いている興味深い話は、現在生き残っている98歳の最高齢の、ニュルンベルグ裁判でのアメリカの検事が、今も覚えている、ナチス降伏の直前にジョージ・パットン将軍が、ぼつりと漏らしたという「我々は間違った敵と戦っていた」という言葉である。これから思い出す、もう一つの漏らされた重大な言葉は、初代CIA長官アレン・ダレスが、アメリカへ連れてきたナチスの諜報専門家ラインハルト・ゲーレンについて言った、「彼は我々の味方だよ、そしてそれだけが肝心の問題だ」という言葉である。これについては、「アメリカのファシズム小史」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/161023.pdf>

「純粹悪的“深層国家”は片が付けられるか？」

<http://www.desociety.org/2012/info2012/170307.pdf>などに詳しく語られる“ペーパークリップ作戦”のことを知らなければならない。ペーパークリップ作戦とは、ナチス敗北後、本来なら処刑すべき、数百人のナチスの科学者、政府高官、専門家を、アメリカがひそかに連れ帰って、対ソ作戦のために重用したという行動を指している。この作戦を取り仕切ったダレスが、ゲーレンに CIA を任せきったことに懸念をもらした同僚に、上のように言った。

こうしたエピソードからわかることは、いかにアメリカの上層部がナチスドイツを信頼し、敬意を払っていたかということである。これは単に敵を利用するという段階を超えている。アメリカは彼らを師として迎え入れ、自国の頭脳にしてしまった。第二次大戦後の極端な反ソ、反共宣伝は、彼らに教えられたことだと言われる。そして現在、アメリカは、師ナチスの果たせなかった夢を果たすべく、その遺志を継ぐ形で行動している。そしてナチスは、今もアメリカを通じて生き続けている。